

## 周作人とギリシア文学

——一九二二年における転回を中心に——

根岸宗一郎

### 一、一九一七年以前の翻訳活動

周作人とギリシア文学との関わりはほぼ一生涯の長きに渡るものである。ギリシア文学との出会いは日本留学中の一九〇八年秋に遡る。当時二三歳の周作人は東京の立教大学で古代ギリシア語の勉強を始める。この動機は新約聖書を翻訳しようと思ったからだ<sup>(1)</sup>と周作人は後年の回想で述べている。これによると留学前に在学していた江南水師学堂で先輩の胡詩廬に影響され聖書を優れた文学として重視するようになっていた。しかし一方で楊仁山の影響により仏典の文章も読んでいた彼の目には、当時聖書会の出していた文理訳本<sup>(2)</sup>が出来の良くないものと映った。そこで聖書を仏典のような雅やかな文言の文章に翻訳することを思い立ったというのである。

周作人は立教大学で古代ギリシア語の初等文法を勉強し<sup>(3)</sup>、次ぎにクセノフォンの『アナバシス』とプラトンの対話<sup>(4)</sup>でギリシア語散文の勉強をしている。しかし聖書のギリシア語はコイナーと呼ばれる、アッティカ方言を根幹に各地の方言が混じってきたヘレニズム世界の共通語であり、古代ギリシア語として習うアッティカ散文のギリシア語とは多少異なるものである。そこで周作人は立教大学と関係のあった三一学院<sup>(5)</sup>へギリシア語聖書のルカ伝の講読に

通っている。

この後それなりの水準の白話文訳の聖書<sup>(6)</sup>が出現し、また時代が白話文の時代に移行したことによって、聖書の文言訳という目標はついに果たされなかった。しかし、日本留学中の一九一〇年、七月三一日と八月一日の「紹興公報」に「古希臘之小説<sup>(7)</sup>」という評論を寄稿し、翌年帰国した後も日本の丸善や相模屋<sup>(8)</sup>からギリシア関係の書物を取り寄せては読んでいることが日記から分かる。そして一九一四年、周作人はギリシア文学の翻訳に本腰を入れる。先ず二月に「中華小説界」第一巻第二期に「芸文雜文」を発表する。この文章ではバイロン、シェリーの他に、ペテーフィなどの民族の魂を歌った詩人たちが紹介されている。この中にサツフォールとテオクリトス<sup>(9)</sup>が一節ずつを割いて紹介されている。

一九一四年の日記の記載を見てゆくと、ギリシア文学の翻訳に関する記述が以下のように見られる。四月一五日「午後エフタリオテイス小説一篇を訳し、「禹城新聞」に与える」。四月一九日「サツフォールのことを編訳する。禹城社に与える予定」。四月三〇日「午後『希臘擬曲』を書き写し、『小説界』に示す予定」。五月二〇日「『希臘之牧歌』一篇を作り、夜遅くなつた」。七月一日「エフタリオテイスの小説一篇を訳す」。九月四日「エフタリオテイスの小説三篇を書き写し、これを姦社に与える」。

一九一四年一〇月、周作人は「中華小説界」第一巻第一〇期の「泰西名著」の頁に「希臘擬曲二首」を発表する。これは古代希臘のヘーローダースの戯曲「取り持ち婆」と「塾の先生」の翻訳であり、中国における最も早い時期の古代ギリシア文学の翻訳といえよう。<sup>(10)</sup>ヘーローダースは紀元前三三〇〇年から二五〇年頃、所謂ヘレニズム時代の作家であるが、伝記的事実は殆ど分からない。一八九一年エジプトで発見されたパピルス文書の中にほぼ完全な形の擬曲七篇及び断片が含まれていた。これによりはじめてヘーローダースの作品は現代の世界によみがえつた。このパピルスは大英博物館に収められ、オックスフォードやケンブリッジなどの研究者により翻刻、出版されている。この後英

訳本もいくつか出版され、周作人はこのうちの一つを手に入れて、これに基づいて二作品を文言文に翻訳したのである。<sup>(1)</sup>

ヘーローダースの戯曲は「ミーモス」と呼ばれる対話による寸劇である。七篇の題名は「取り持ち婆」「売春宿の主人」「塾の先生」「嫉妬深い女」「アスクレーピオスに奉獻し犠牲を捧げる女達」「靴屋」「夢」となっており、一般庶民の日常に取材した喜劇である。乱れイアンボスという韻律の韻文で書かれ、全体はどれも一〇〇行前後の短いものである。

周作人は擬曲の前に短い前書きをつけており、次のように述べている。

「擬曲はまた詩の一種である。伝奇の体裁に倣い、非常に短く簡単である。多くは日常の些細な物事を描き、人情の機微を穿つこと絶妙である。古代の作者の中ではヘーローダースが最も優れている。中国の漢の初めに生まれており、著作はことごとく散佚した。二〇年前漸くエジプトの朽ちた棺の中からその作品が手に入った。わずかに七章と断簡三、四点があるのみである。今二篇を訳す。これらは塾の先生と生徒、及び取り持ち婆の行状を述べていて、ありありと目の前に浮かぶかのようなものである。古今の人情が元来遠く隔たつてはいないとはおかしなものである。」

ヘーローダースに関する説明、及び作品の評価は現在のものとさして変わらぬ。ここで注目すべきなのは、ヘーローダースの作品が一般庶民の生活を描き、人情の機微を捉えているという点に周作人は関心を引かれていたということである。また、古今の人情の不変性に対する信頼も見て取ることができる。

実際にこの二つの擬曲のあらすじを見てみよう。

「取り持ち婆」は夫が遠くへ行つて家を留守にしているメートリチエのもとへ取り持ち婆のギリッスがやってきて、ギユッロスとの浮気を取り持とうとして説得しようとするが、メートリチエは結局話に乗らずにギリッスを追い出す、という話である。

次に「塾の先生」は、何もやる気のない馬鹿息子を母親が先生のところに連れてきて、叱ってやってくれと頼む。先生も勉強を教える気はなく叱ることを引き受けたとばかり、いきなりこの息子のしりをむち打つ。その後は息子と先生の屁理屈の対話である。

周作人はこの後、一九二一年に「取り持ち婆」を白話文に訳し直して「晨报副刊」に発表し、一九二五年には「嫉妬深い女」を「語絲」に、一九三〇年には「駱駝草」に「嫉妬深い女」「塾の先生」「売春宿の主人」「アスクレーピオスに奉獻し犠牲を捧げる女達」を掲載する。そして一九三四年擬曲七篇をテオクリトスの作品五篇とともに『希臘擬曲』として商務印書館から刊行するに至る。このことから周作人のヘーローダースへの関心はかなり深いものであったことが窺える。

周作人がヘーローダースの擬曲に出会ったのは日本留学中のことと思われる<sup>(12)</sup>。この時期には現代のフランス人作家マルセル・シュウオブが古代ギリシアの擬曲を模倣して作った擬曲集も丸善で手に入れていた<sup>(13)</sup>。そしてこの擬曲集を、一九二二年二月「越社叢刊」<sup>(15)</sup>一集に「法国須華百作『擬曲』」として翻訳発表している。この序文で周作人は擬曲がギリシアに源を発するものであり、最も優れた作者ヘーローダースの作品が二〇年前に発見されたことに言及している<sup>(16)</sup>。このことから考えると、ヘーローダースへの関心がこの現代の古代ギリシア風擬曲集の翻訳をなさしめたと言えよう。一九一〇年に丸善でこの擬曲集を買っていることからヘーローダースの作品に触れたのはさらに前ということになる。周作人はこの擬曲集を一九一六年六月「吾社叢刊」<sup>(17)</sup>第三期に「須華勃『擬曲五章』」として改めて発表している。この小引では次のように述べている。

「擬曲はまた多くの流れの中の一支脈であり、ギリシアでは「ミモース」と呼んだ。中国の周代末期頃に盛んに作られたが、現在ではすべて散佚してしまった。ただヘーローダースの作品七章だけが残っており、私はかつて「取り持ち婆」と「塾の先生」の二篇を訳し、雑誌に掲載した。」

このようにこの時期のギリシア擬曲への関心はかなり強いものであったと考えられる。

一方、一九一四年二月「叢社叢刊」第二期に「新希臘小説」を掲載している。訳記から現代ギリシアの作家エフタリオティスの作品の翻訳であることが分かる。周作人は後に一九一八年から一九二一年にかけて七篇を翻訳している。一九二一年一〇月の「小説月報」第一二巻第一〇期の訳者附記に、エフタリオティスの作品はすべてローズ (M. H. Rouse) <sup>(19)</sup> 「希臘諸島小説集」からの重訳であることを述べている。

ギリシア文学の翻訳作品の発表はこの一九一四年に集中し、その後、一九一七年に北京大学での講義用に「ギリシア文学史」を書くまでの間ギリシア文学関係の著作は「ホメーロスの叙事詩」(一九一六) 一篇のみである。しかし周作人のギリシアへの関心はすたえることはなかった。一九一五年四月一〇日の日記には次のように記されている。

「私は以前たぐさんの名前を好んで作っていたが、今、啓明に決めた。章太炎先生が書いている持光という別号のようである。ギリシア語の明けの明星  $\phi\lambda\omega\phi\omega\pi\omega\mu$  <sup>(20)</sup> の語の意味を訳したものである。」

また、前述のように、シェウオブの古代ギリシア風擬曲五章を一九一六年六月「叢社叢刊」三期に改めて掲載している。

また、日記によると、この間に Stending <sup>(21)</sup> 『ギリシア神話』、シエーン・ハリソン “Ancient Art and Ritual” <sup>(22)</sup>、Lawson <sup>(23)</sup> 『近代希臘民族と古宗教』といった、希臘の民族・宗教に関する著作を読んでいる。一九一七年に入ってからもフレージャー『サイキス・タスク』を読んでいるように、西欧の文化人類学的なギリシアへのアプローチに関心を示していたことが分かる。

## 二、一九一七年から二十一年までの翻訳活動

一九一七年四月、北京大学で教鞭を執るために周作人は紹興から北京へ移る。そして北京大学で担当することになった「欧州文学史」の講義のために講義録を執筆する。これは一九一八年一〇月『欧州文学史』北京大学叢書之三として上海商務印書館から出版される。内容は第一巻「希臘」、第二巻「羅馬」、第三巻第一篇「中古与文芸復興」、第三巻第二篇「十七十八世紀」となっている。各巻はそれぞれ全体の三分の一ずつである。従つてギリシア・ラテン文学で全体の三分の二を占めており、所謂西洋古典に明るい学者として教鞭を執つた周作人の一面を示していると言えよう。

一九一八年二月「新青年」第四巻第二号に「古詩今訳」の題でテオクリトスの牧歌第十の翻訳を発表する。<sup>(24)</sup>これが周作人最初の白話文の作品である。テオクリトスは紀元前三世紀前半、ヘレニズム時代の作家であり、牧歌という形で都会人の郷愁を歌い、近世に至るまで広範な影響を及ぼした。テオクリトスの牧歌第十はミロンとバットスという二人の刈り入れ人の対話形式になっており、擬曲の台本のような形に訳されている。一九一四年五月二〇日に書かれた「希臘之牧歌」<sup>(25)</sup>もテオクリトスに関するものであることが明らかなので、テオクリトスに対する関心も一九一四年以来持続しているものと言える。日記によると一九一七年九月一六日の項に「テオクリトスを読む。この二と七が最もよいが、残念ながら未だ訳すことができない。」翌一七日の項にも「テオクリトスを読む」とある。また日記によると、この時期はちょうど『欧州文学史』のうちの第一巻「希臘」の執筆中にあたる。

ところで、前述のようにテオクリトスの牧歌第十は対話形式で、擬曲の台本のように訳されている。この形式は以前一九一四年一〇月の「中華小説界」第一巻第一〇期に発表したヘーローダースの擬曲と類似していると言えるのではないか。少なくとも周作人によつて翻訳された形式を見ると前者が文言で後者が白話であるという以外に異なると

ころはない。そもそもヘーローダースの擬曲はギリシア語の原文でも韻文で書かれており、テオクリトスの牧歌もやはり韻文で書かれなかつ問答体を用いている。用いられている韻律に違いがあることを除くと、もともと形式的、さらには作品の長さともに近い作品であると周作人の目に映つたとしても不思議ではないだろう。

周作人はこの両作家の作品をどのように位置づけていたのだろうか。一九一七年に執筆された『欧州文学史』の第一巻「希臘」では、第八章「雜詩歌」に「十九、牧歌〔Theokritos〕」「二十、擬曲〔Herods〕」というように続けて取り挙げられている。そして後者では次のようにヘーローダースとテオクリトスを対比している。

「その（ヘーローダースの）擬曲はすべて乱れイアンボス（ギリシアの韻律の一つ）を用いており、故に文章の美しさではテオクリトスにかなわない。しかし、人生のリアルな描き方は絶妙である。」（擬曲の）第四章は医者の神（アスクレーピオス）の祭りの話で、テオクリトスのアドニウス祭と肩を並べられよう。」

以上のように周作人にとってテオクリトスとヘーローダースはかなり類似性をもったものとして捉えられていることが分かる。

このことは後に周作人が一九三四年にヘーローダースの擬曲七篇とテオクリトスの牧歌五篇を組み合わせて『希臘擬曲』一冊として商務印書館より出版していることから裏付けられよう。

\*\*\*

一方で、周作人は現代ギリシアの作家エフタリオティスの翻訳も行っている。一九一八年九月二十五日の「新青年」第五卷第三号に「ヤンニス爺さんとロバの物語」と「ヤンヌラ婆さんの復讐の物語」の二編の翻訳を発表する。一九二〇年九月一〇日「東方雜誌」第一八卷第一七号には「神父フロニウス」を翻訳発表している。

エフタリオティスの翻訳が最も多くなるのは一九二一年夏のことである。しかもこれを最後に周作人は二度とこのエフタリオティスの作品を翻訳することはない。

一九二二年「晨报副刊」誌上に八月二日・三日に「初窓」、八月二日・一日に「クトシャフェリス」、八月九日に「ファンガリスと彼の新年の餅」を掲載。さらに一〇月一〇日「小説月報」第一二巻第一〇号に「イブラティン」と、エフタリオティスの英訳本であり、周作人が翻訳の底本とした『希臘諸島小説集』の訳者ローズの序文を「希臘諸島にて」という題の下に翻訳掲載している。

以上により、一九一四年から一九二一年に至るまでの間、現代ギリシアの作家エフタリオティスに対する関心もつづいていたことが分かる。

この一九二一年に、周作人は肋膜炎を患い、六月二日から九月二十二日まで西山の碧雲寺で療養生活を送っている。エフタリオティスの一連の翻訳は正にこの療養のさなかに行われた。日記によると七月二十六日に「午前中にエフタリオチスを訳し、午後になって二篇を完成した。合わせて三千字。」とあり、これ以降いくつかこうした記述があり、八月一日に「連日『希臘島小説集序』を訳し、今日終わった。」とある。この間一貫してエフタリオティスの作品と、この訳序の翻訳を行っていることが分かる。

こうして翻訳された内の「イブラティン」と「希臘諸島小説集訳序」とは「小説月報」第一二巻第一〇期に掲載されるが、この号は「被抑圧民族特集」号であった。このことから考えてもエフタリオティスの作品は留日期に周作人が兄魯迅とともに編んだ『域外小説集』以来一貫して翻訳を続けてきた被抑圧民族文学の一種として選択されていると言える。実際、エフタリオティスの作品は一九二〇年刊行の『点滴』、一九二一年増訂版として再版された『域外小説集』、一九二二年五月の『現代小説叢書』、一九二八年の『空太鼓』（『点滴』の改訂版）という一連の被抑圧民族の文学を集めた翻訳作品集に収録されている。そして、先述の古代ギリシアの作家ヘーローダースやテオクリトスなどの作品とは同じ作品集に収められることはなかったのである。これは明らかに現代ギリシア文学と古代ギリシア文学とを異なるカテゴリーの作品として周作人が扱っていることを示している。



現代ギリシアの作家の中でエフタリオティスだけが選ばれて翻訳されたことには、周作人が現代ギリシア語を勉強していなかったこと、及び現代ギリシアの作家の作品の中で手に入ったのがローズの翻訳した『希臘諸島小説集』だけだったということが主な理由であろう。

一九二二年九月二十九日の「晨报副刊」に周作人は「新希臘与中国」を發表する。これは「九月西山にて」と書かれているので、九月二二日に自宅に帰る以前、西山でかかれたものである。この文章で周作人は二つの老国ギリシアと中国の共通点と相違点を挙げ、現在一方が独立し一方が半植民地状態にあるという立場の相違の由来を求めている。先ず、狭い郷土觀念・政權争い・古い風習の固守・詐欺・多神教的迷信、以上の五つの共通点を挙げる。こうした上でギリシアがトルコから独立し得た理由を次のように述べる。「ギリシア人には一つの特性がある。祖先から伝えられてきたものでもあるが、それは熱烈に生を求める欲望である。」この「熱烈な生を求める欲望」が欠けているために中国は独立できないのだと周作人は述べる。かつて周作人は留日期の論文『論文章之意義暨使命因及中国近時論文之失』において、ギリシアは国が滅んでも文化が生き続けることで民族が保たれ、独立することができたと論じていた。

このように周作人がギリシアを見ると、同じ老国であるギリシアが現在独立国家となつていくことから、中国再生のモデルとして見るという一面が留日期以来存在していたことが分かる。独立を勝ち取った被抑圧民族であり、しかも中国と同じ老国であるということから、他の被抑圧民族よりなお一層親近感を持ち得たとと言える。そしてこのことがギリシアへの関心の一つの柱であり、エフタリオティスの翻訳作業を支えたものであったと言える。

しかし一方で、古代ギリシア文学とのつながりを全く意識していなかったわけではなかった。一九二〇年九月一日「東方雜誌」第一八卷第一七号に掲載した「神父フロニユス」の訳者附記に次のように述べている。

「私たちはこの一編の物語を読むと、思わず二千年前のテオクリトスを連想する。彼が描写する風景は収穫祭のあ

の牧歌のようなものがある。」

このように述べつつも「著者は独立戦争時代の人なので愛国思想に富んでいる。そして異民族に対する反抗の運動は懐古の情を根としている。これは圧迫を受けている民族においては自然の趨勢である。現代のポーランドやアイルランドがその例である。」というようにまとめているところは被抑圧民族の文学としての意識の強さを物語っている。

しかし、同じ号に掲載された「ギリシア諸島にて」はローズがギリシアを訪れて見聞きしたギリシアの風土・習俗を描き、現代でも古代ギリシア文学に歌われた雰囲気がそこかしこに生きているという内容である。つまり、周作人が現代ギリシアを見るときに、古代ギリシアの文化・文学へ思いを馳せないわけにはいかなかったということである。

### 三：一九二一年における古代ギリシア文学の翻訳

西山療養中の一九二一年七月末からの一連のエフタリオティスの翻訳、及びギリシア関係の著作から、この時期にギリシアへの関心が特に高まっていたことが分かる。この希臘への関心の高まりは、また西山療養を終えた後の一〇月後半から「晨报副刊」誌上に掲載される一連の古代ギリシア文学の翻訳となって現れる。すべて一〇月二一日から年末までに訳されており、掲載順に並べると次のようになる。一〇月二八日「大言」、十一月九日「兵士」、十一月四日「魔術」（以上、ルーキアーノス）、十一月二七日「情歌」、十二月四日「刈り入れ人」（以上、テオクリトス）、十二月一日「苦く甘い」（ロンゴス）、一九二二年一月一日「取り持ち婆」（ヘーローダース）。

周作人は一九三四年にヘーローダースとテオクリトスの作品を集めて『希臘擬曲』を出版している。この序文では、古代ギリシア語は勉強したが聖書の翻訳という目標もなくなり、アテーナイ時代の偉人たちの作品を訳すにはあまりにおそらく荷が重すぎる、と述べた上で次のように述べている。

「またこの頽廢の時代に生き、嗜好上の關係もあり、個人的に言うとな私が好きなのはむしろアレクサンドリア時代のテオクリトスとヘーローダース、ローマ時代のルーキアーノスとロンゴスなのである。」

ここで周作人が個人的に好きな作家として挙げている4人の作品が一九二二年一〇月から年末にかけて翻訳、発表されたのだということが分かる。

これら七篇の形式を見ると、テオクリトスの「情歌」とロンゴスの「苦く甘い」を除き、五編が問答体である。すべて白話文の散文に翻訳されており、長さも「晨報副刊」の一面に納まる短いものである。ヘーローダースとテオクリトスについては既に述べたので、ここではルーキアーノスについて見ることにする。

ルーキアーノスは、紀元後一二〇年頃から一八〇年頃のローマ時代の作家で、流麗なギリシア語を操り、機知と諷刺に富んだ散文作品を残している。ここで訳されたルーキアーノスの作品はすべて『遊女たちの対話』<sup>(26)</sup>からのものである。翻訳作品のそれぞれのあらすじを次ぎに述べておく。

「大言」は、二人の兵士が戦での手柄を遊女に聴かせて飲心を買おうとする。しかし、口から出任せに敵將の頭を割ったという話をする、かえって遊女がおそれおののいて逃げていって仕舞うという話。

「兵士」は、遊女と楽戸の女の対話。楽戸の女は自分の笛が壊されてしまったいきさつを語る。彼女が、別の遊女と客の席で笛を吹いていると、客の恋敵の軍人たちが宴席に乱入して客を殴打し、彼女の笛も壊したというのである。

「魔術」は、二人の遊女の会話。別の男との偽の噂を街頭に書かれたために、なじみの男に背を向けられてしまった一人がもう一人にどうしたらよいかと泣きつく。するともう一人は、一度背を向けられた男を魔術師の婆さんの魔術で自分に取り戻してもらったことが以前あったと言う。これを聴いてその婆さんに頼もうというところで終わる。

このようにどの作品も名もない遊女たちの日常の一こまを描いたものである。周作人はルーキアーノスについて「大言」訳者附記で次のように紹介している。

「ルーキアーノスは2世紀のシリア人で、アテネで学問を講じ、ギリシア語で著作をした。その問答体の諸篇は最も優れており、喜劇擬曲、諷刺詩、哲学問答といった諸種の要素を備えている。」

この後に「古今相隔てること七百余年（千七百余年の誤り…筆者）、しかし人情は変化してない。古い文書を讀むことには現代文芸と同じ味わいがあるのでこれを訳した。」と述べている。人情の普遍性を述べている点は、以前ヘーローダースを訳したときとほぼ同じ言い方である。

「兵士」の訳者附記には次のようにある。

「この一篇も遊女問答の一つであり、本来第一五に列せられている。ヘーローダースの擬曲第二は売春宿の主人バツタロスが水夫タレースを、娼婦ミュルタレーをかすめ取ったと訴えるという話で、大体似ている。」として、このあとにヘーローダースの擬曲第二のバツタロスとタレースの対話の一節を引用している。

また「魔術」の訳者附記には次のようにある。

「これは遊女問答の第四篇で、テオクリトスの牧歌第二と似ており、とても軽妙である。」

以上三篇の訳者附記を見て分かるのは、ルーキアーノスの作品を考えると常に周作人は常にヘーローダースとテオクリトスを念頭に置いていることである。同様のことがロンゴスについても言える。ロンゴスの「ダフニスとクロエー」を抜粋して訳した「苦く甘い」の訳者附記に次のように述べている。

「ロンゴスの事跡については何も分からず、ただ大体四世紀頃の人であるということが知られているだけである。彼の著した「ダフニスとクロエー」は西欧の田園小説の始祖であり、テオクリトスの牧歌における位置と全く同様である。」以上のように周作人はルーキアーノスとロンゴスという二人のローマ時代の作家の作品を見る際に、ヘーローダースとテオクリトスという二人のヘレニズム時代の作家の作品を常に意識していたことが分かるのである。そしてこの二人のヘレニズム時代の作家の作品との類似性がルーキアーノスとロンゴスという作家の作品を翻訳の対象とし

て選択する要因となったことが考えられよう。ルーキアアノスの「遊女たちの対話」は名もない遊女たちの日常を描き、庶民の実生活を写し取ったヘーローダースに類似し、ロンゴスの「ダフニスとクロエー」は山羊飼いの少年と羊飼いの少女の恋愛を描いており、テオクリトスの牧人たちを歌った牧歌に類似している。さらに大きく括るならば、古代ギリシア・ローマ時代の庶民の生活情緒を伝えている点で、これら四人の作家の作品は共通していると言える。この点に周作人がこれらの作品を好んだいちばんの理由があるのではないだろうか。

ところで、「晨报副刊」誌上に発表されたこれら四人の作家の作品の翻訳は、すべて白話散文による問答体である点で形式的に共通している。作品の原文では、ヘーローダースとテオクリトスが古代ギリシア語の韻文、ルーキアアノスとロンゴスは古代ギリシア語の散文であるが、周作人は敢えてすべて中国語白話散文に翻訳しているのである。周作人はこれら一連の古代ギリシア文学の翻訳の合間に、日本の狂言を翻訳して同じく「晨报副刊」誌上に発表する。一九二一年一月十八日「骨皮」、二月二十五日「伯母ガ酒」という二篇<sup>(27)</sup>であり、発表時期はロンゴスの「苦く甘い」とヘーローダースの「取り持ち婆」との間に当たる。この二篇も白話散文の問答体で訳されており、形式的には一連の古代ギリシア文学の翻訳と全く同じである。しかも、日本の狂言は庶民の日常生活を描いたものであり、庶民の生活情緒を伝えている点で内容的にも共通性をもっているといえる。

このように見ると、周作人が「人情」というものの古今東西を越えた普遍性に信頼を置き、古代ギリシアと日本の庶民の生活情緒を描いた作品を選び翻訳していたということが言える。そしてこれが自分の好みにあつた翻訳対象の選択であることが分かる。そこで次に、先ほども指摘したように被抑圧民族の文学と周作人が捉えていた現代ギリシアの作家エフタリオティスの作品の翻訳が、一九二一年の夏以降なくなることとの関連について考えてみたい。

#### 四、翻訳活動全体の変遷の中で

錢理群氏は「周作人の翻訳活動は『侠女奴』と『玉虫縁』等の試作を除けば、明確に二つの段階に区分することができる。前世紀末から『五四』以後は主にロシアと被圧迫民族の文学を翻訳した。(中略)『陀螺』から始まってしだいに古代ギリシア文学、古代及び中古日本文学の翻訳へと転化した。」と述べている。<sup>(28)</sup> 筆者は、次ぎに、より具体的に周作人の翻訳活動の変遷を調査し考察をすすめようと思う。

後の頁の図表1に周作人の生涯における外国文学翻訳の国別・年別統計を示した。ただし特にギリシアと日本については古代文学と現代文学とを分けて扱っている。これを見ると、日本の現代文学・古典文学と古代ギリシア文学の翻訳は一生涯に渡って続けられていることが分かる。しかし何より目につくのは、一九二一年を境に東欧・北欧・ロシア(革命以前のロシア内部における抑圧関係から生まれた文学なので被抑圧民族文学と同じカテゴリーと言える)といった所謂被抑圧民族の文学の翻訳が全くなくなっていることである。ただし一九二二年にロシア文学の翻訳があるが、これはすべてエロシエンコ作品である。エロシエンコは一九二二年から二三年にかけて中国に滞在し、魯迅・周作人が自宅に居住させ、講演会の世話なども行っていたことは周知のことである。従ってエロシエンコとの交流の一環として翻訳されたもので、この時期ロシア文学でありながら翻訳された唯一の例外と言える。<sup>(29)</sup> こう考えるならば、留日期以来兄魯迅と共に続けてきた被抑圧民族文学の翻訳を一九二一年を以て終了したという意識が周作人の中にあつたことが考えられる。

一九二一年における周作人の外国文学翻訳をさらに細かく見ると、次のようになっていいる。西山療養以前には現代日本文学が一篇あるのみである。西山療養期間中(六月二日から九月三日)には、シエンキエーヴィチなどポーランド作家の作品が六篇、エフタリオティスが四篇及び訳本序文一篇、現代日本文学三篇、古代ギリシアの挽歌二篇、フィ

ンランド一篇、スペイン一篇、日本の俗歌一篇<sup>(31)</sup>、西山療養後は、古代ギリシア文学七篇、日本の狂言二篇、日本の俗歌二篇、現代日本文学二篇、フランス文学一篇である。<sup>(32)</sup>

以上から分かることは、周作人が西山療養中に被抑圧民族の文学である、現代ギリシアの作家エフタリオティスやポーランドのシエンキエーヴィチなどを大量に翻訳していることである。そして西山療養を終えた後は被抑圧民族の文学を翻訳することは一切なかったのである。この被抑圧民族文学にかわって、療養後に翻訳されているのが古代ギリシア文学や日本の狂言・俗歌、現代日本文学なのである。これは明らかに西山療養後は翻訳の対象を被抑圧民族文学から転換したことを示していると言えよう。錢理群氏が指摘した二段階の翻訳活動の移行期は、『陀螺』が出版される一九二五年よりもさらに早い一九二一年の九月・一〇月ということになる。そして、この移行は急激に、明確に起こっていることが特徴と言えよう。

兄魯迅と翻訳編集した『域外小説集』（一九〇九）以来刊行した被抑圧民族文学の翻訳作品集は一九二〇年『点滴』、一九二一年『域外小説集』（増訂版）、そして一九二二年『現代小説訳叢』で一段落を迎える。（一九二八年出版の『空太鼓』は『点滴』の改訂版であり、新しい作品を収録していない。）周作人はこの『現代小説訳叢』に一九二〇年から二一年までに訳した被抑圧民族の文学を収めており、序文で次のように述べている。

「我々は今や『民報』に載った文章を殆ど忘れてしまったが、『侮辱され損害を受けている』人と民族の心に対する同情は既に精神の中にしみ込んでいる。」

この序文は、一九二一年一月二二日に書かれており、二一年の西山療養中迄に訳した被抑圧民族文学の翻訳にこれで一段落をつけたと言えるのではなからうか。

周作人は留日期以来、兄魯迅の被抑圧民族文学の紹介という構想に共鳴し、協力してこの作業を進めてきた。周作人が被抑圧民族文学の翻訳に終止符を打ち、自分が留日期以来好んでいた庶民の生活情緒を描いた古代ギリシア文学

や日本文学の翻訳に本格的に取り組むようになったということは、兄魯迅や章炳麟の影響の下で形成された文学観を離れ、自らの素質にあった文学的立場を選択したということではないだろうか。

奇しくも翌一九二二年一月二二日から「晨报副刊」誌上で彼の第一散文集となる「自己的園地」の散文群が連載され始める。特にこの一月二二日に掲載された「自己的園地之一、自己的園地」は、彼の文学者としての立場を述べたものである。木山英雄氏は「いつたいかれが、「自己」や「個性」という、狭義の文学性を或いはかれ自身の言葉で「趣味」を、自分の文章に強く求めるようになったのは、「語絲」発刊よりそう以前のこととなく、単行本でいうと「自分のはたけ」に含まれる諸篇（一九二二〜二三）<sup>(33)</sup>がその境目に当たっている。」と述べる。また、小川利康氏は「その（理想主義の）夢は、五四運動の挫折、周作人自身の発病によって、二一年には色あせてしまう。（中略）二二年以降の「文学家Ⅱ精神的貴族」の見解、「頹廃派」評価に見られる近代的個人主義への共感は、理想を裏切るように展開する現実社会の中での孤立感を代弁するものであったと考えられる。」<sup>(34)</sup>というように「自己的園地」における文学観の変容を捉えている。

このように一九二二年の西山療養後から一九二二年の「自己的園地」の間に周作人の文学観の大きな変化を見ると、この点で見解の一致を見ている。木山英雄氏はまた「『文学革命』に大貢献のあった『人の文学』以下の評論の文章法から、かれは意識的に脱皮をはかったのだ、ということがができる。」<sup>(35)</sup>と述べる。筆者が述べてきたギリシア文学の翻訳という側面から考えるならば、ヘーローダースなどのヘレニズム時代の擬曲への関心・嗜好は留日期以来一貫したものである。しかし、古代ギリシア文学への関心は時々翻訳という形で顔をのぞかせるものの、兄魯迅との共同作業に始まった被抑圧民族の文学の翻訳が翻訳活動の前面に常に出ている。この被抑圧民族文学の翻訳が一九二一年の西山療養期間を以て終息することで、彼の好みにあった以前から一貫した関心を寄せてきた古代ギリシア文学の翻訳が前面に現れてきたのだと言える。彼の翻訳活動においては、章炳麟や魯迅の影響下に形成された「被抑圧民族文学



の「翻訳紹介」という構想が留日期から五四期を通じて保持されてきた。周作人が翻訳の対象を大きく転換したということは、こうした構想から自らを解き放ち、以前から顔をのぞかせ、底流として流れてきた彼の個性にあった文学のあり方をはつきりと前面に押し出すようになったことを示していると言える。つまり周作人の文学的アイデンティティの確立期と評価することができるのではあるまいか。

## 註

- (1) 『希臘擬曲』序（一九三四年一月、上海商務印書館）、『知堂回想録』「学希臘文」（一九七四年四月、香港三育図書文具公司）。
- (2) 「旧新約聖經」（浅文理訳本）…施約瑟訳。一九〇二年、上海、大美国聖經会。
- (3) テキストはハイドの『希臘語初等文』。
- (4) これらは現在でも古代ギリシア語の初等文法を終えた後に、アッティカ散文読解の練習教材として用いられる。
- (5) 『立教学院百年史』（一九七四年、立教学院）には、「マキム主教と一九〇三年ロイドの跡を襲ったタッカー H. St. George Tucker 総理とは清国留学生にキリスト教的感化を与え、かつ日本で勉強するための予備教育として、伝導局に新たに学校を設立する許可を求め、その協賛を得て一九〇六年四月、三一会館を教場として志成学校を開設。」とある。三一学院とはこの志成学校のことであろう。
- (6) 「新旧約全書」（官話和合訳本）…一九一九年、上海、大美国聖經会。
- (7) 現在日本に所蔵がないため筆者未見。
- (8) 相模屋…本郷の真砂町にあった。主人の小沢民三郎がもと丸善書店に勤めていた関係から、洋書の取り次ぎも頼めた。
- (9) 『夜読抄』「習俗与神話」（一九三三年二月一日）において、日本留学中の一九〇七年にライター・ハガードとアンドリュール・ラングの共著『紅星佚史』（“The Worlds Desire”）の翻訳を始めており、この時ラングの著作としてテオクリトスの牧歌の訳本も持っていたことが述べられている。このラングの訳本は、“Theocritus, Bion and Moschus, rendered into English prose with an introductory essay, by A. Lang, London, Macmillan, 1889.”である。この本は、一九〇六年から一九〇九年の間には毎年版を重ねており、手に入りやすかったと思われる。

- (10) まだ翻訳・翻案の時代であり、『域外小説集』以来の直訳の方法で翻訳紹介された本篇は原作に忠実な翻訳としては初期のものと言えよう。
- (11) 一九三〇年七月「駱駝草」第一〇期に掲載された「嫉妬深い女」訳者附記に「六年前に出した『陀螺』に収録した二篇（取り持ち婆」と「密談」筆者）は、英訳本に基づいて重訳したものであった。」とあるので、さらに以前の翻訳である「中華小説界」のものが基になったのも英訳本であつたと考えられる。アメリカの Library of Congress の “the National Union Catalog Pre-1956 Imprints” にある、一九一四年以前の英訳本は “A realist of Aegaeon; being a verse-translation of the mimes of Herodas, by Higo sharpley”, (London, D. Nutt, 1906) 一種類のみである。
- (12) 『周作人文類編』（鐘叔河編、一九九八年九月、湖南文芸出版社）に収録された未刊稿「墨痕小識」（一九一四年六月〜一九一九年十二月）の一九一〇年十二月の項に「紹興公報」のために『アンデルセン伝』、ギリシア『擬曲』、Ephraïm 著『ロシノス』を作る。」とある。ここでいうギリシア『擬曲』がヘーローダースのものである可能性が高いので、周作人がヘーローダースの擬曲に触れたのは日本留学中の一九一〇年以前と推測される。
- (13) Schwob, Marcel (一八六七―一九〇五) … フランスの小説家。短編小説に優れる。『無言道化芝居』(Mimes, 一八九四) … つまり周作人の訳した『擬曲』では新古典主義的手法を用い、散文詩に近い文体でギリシア世界を扱っている。周作人はフランス語を勉強してないので、英訳本から重訳していると考えられる。前出 “National Union Catalog Pre-1956 Imprints” にある、英訳本は “Mimes, with a prologue and epilogue, by Marcel Schwob; done into English by A. Lenzie. Portland, Me., T. B. Mosher, 1901.” 一種類である。
- (14) 『看雲集』「希臘的古歌」（一九二〇年五月二十五日）に、東京の丸善でシュウォプの擬曲集の Mosher 版訳文を買ったことが述べられている。この版は (13) に挙げたものである。
- (15) 越社叢刊不定期刊。一九二二年二月紹興で創刊。宋紫佩が創設し編集を勤め、魯迅が編集を補助した。越鐸日報社が総発行者、南社が一部発行。停刊時期は未詳。現在残る二期分は南社の分社である越社の発行。
- (16) ここでは名前が「路師」となっているが、「二十年前断簡が初めて出て、わずかに七章が存在する。」という説明から、ヘーローダースのことであるのは間違いない。
- (17) 越社叢刊不定期刊。一九一三年紹興で創刊。一九一六年頃停刊。現在四期分が残る。

- (18) Ephraïotes, Argyres (一八四九—一九二二)：現代ギリシアの詩人・小説家。生涯の大半をイギリスで過ごす。シモネイキ(民衆語)推進派。詩・散文・戯曲・歴史など幅広く活躍。『島の物語』(Nisiotikes istories)が周作人の翻訳した『希臘諸島小説集』にあたる。周作人が基づいた英訳本は、“Tales from the isles of Greece; being sketches of modern Greek peasant life, translated from the Greek by W. H. D. Rouse. London, J. M. Dent, 1897.”
- (19) William Henry Denham Rouse (一八六三—一九五〇)：イギリスの西洋古典学者。
- (20) 「光をみたらしつゝのもの」の意味。「明けの明星」をも意味する。
- (21) Steuding, Hermann “Greek and Roman mythology”, based on Steuding’s “Griechische und römische mythologie”, by Karl Pomeroy Harrington and Herbert Cushing Tolman, Boston, New York etc. Leach, Shewell, and Sanborn, 1897. 著者は“Greek and Roman mythology & heroic legend”, translated and edited by Lionel D. Barnett. London. Dent & Co. 1901.
- (22) Harrison, Jane Ellen, “Ancient Art and Ritual”, London, William & Norgate, 1913.
- (23) Lawson, John Cuthbert “Modern Greek folklore and ancient Greek religion. A study in survivals.” Cambridge, University Press, 1910.
- (24) 一九二五年四月「語絲」二四期に発表した「希臘牧歌之二」はテオクリトスの牧歌第二七篇の訳であるが、翻訳の底本としたのは“The Loeb Classical Library”に収められているものと述べている。この版は、“Greek Bucolic Poets (Theocritus, Bion, Moschus), translated by J. M. Edmonds, 1912. London W. Heinemann Ltd.; New York, G. P. Putnam’s sons.”である。これはギリシア語の原文と英語の訳文が左右のページに対置されている。一九一八年二月の翻訳の底本としてこれを用いた可能性があるが、註の(9)に挙げたアンドリュウ・ラングの英訳本を用いた可能性もある。
- (25) 「希臘之牧歌」は、その名が日記に見られるのみで、発表されたかどうかは不明。
- (26) ルーキアーノスの『遊女たちの対話』の各話にはもともとこうした題は付けられておらず、訳題はすべて周作人の付けたものである。
- (27) 芳賀矢一編『狂言二十番』(袖珍名著文庫、富山房、明治三六年七月)からの翻訳であることが、「骨皮」の訳者附記に記されている。
- (28) 銭理群『周作人論』(十二、周作人的翻訳理論与实践)(一九九一年八月、上海人民出版社)

- (29) この後、一九五二年にロシア民話集、一九五三年にウクライナ民話集を翻訳・刊行しているが、これらはギリシア神話（一九五八年）、古事記（一九六三年）の翻訳などとともに、民俗学的関心の産物と言えよう。
- (30) 三月一七日千家元麿「薔薇の花」。
- (31) 六月二十九日「日本俗歌五首」、七月一日ゴムリツチ（ポーランド）「燕子と胡蝶」、七月三日ブルス（ポーランド）「陰」、七月六日佐藤春夫「雉子の炙肉」、七月七日シエンキエーヴィチ（ポーランド）「二つの草原」、クノフニチカ（ポーランド）「私の姑母」、七月二十六日エフタリオティス（現代ギリシア）「初恋」、七月三十一日エフタリオティス「クトシヤフェリス」、七月三十一日アホー（フィンランド）「父がランプを持って帰ってきた頃」、八月一日エフタリオティス「イブラティン」、八月九日エフタリオティス「ファンガリスと彼の新年の餅」、八月十五日ローズ（イギリス）「ギリシア諸島にて」（エフタリオティスの『希臘諸島小説集』の訳者による序文）、八月二十日志賀直哉「清兵衛と瓢箪」、八月二十日「希臘の挽歌」、八月「雑誌日本詩三十首」、八月二十五日ホレウインスキー（ポーランド）「ポーランド文学概観」、九月一日イパニツチ（スペイン）「顛狗病」、九月一日テトウマヤール（ポーランド）「故事」、九月一六日「希臘の挽歌」。以上が西山療養期間（六月二日から九月二日）中の翻訳である。
- (32) 療養終えて自宅に戻った後の翻訳は次の通りである。一〇月一五日国木田独歩「巡查」、一〇月二一日ルーキアノス「兵士」、一〇月二二日同「魔術」、一〇月二三日「日本俗歌八首」、一〇月二八日ルーキアノス「大言」、一十一月一五日テオクリトス「刈り入れ人」、一十一月二〇日ボードレル（フランス）「散文小詩」、一十一月二〇日テオクリトス「情歌」、一十二月五日ロンゴス「苦い甘い」、一十二月一五日日本狂言「骨皮」、一十二月二〇日同「伯母が酒」、一十二月二四日「日本俗歌四十首」、一十二月二五日鈴木三重吉「金魚」、一十二月三〇日ヘーローダース「取り持ち婆」。
- (33) 木山英雄「実力と文章の関係、その他」散文の発達と周氏兄弟（『現代アジアの革命と法』（仁井田陞博士追悼論文集二、一九六六年）
- (34) 小川利康「五四時期の周作人の文学観——W・ブレイク、L・トルストイの受容を中心に」（『日本中国学会報』第四十二集、一九九〇年）
- (35) (33) に同じ。

リ 南 カ ア フ	ユ ダ ヤ	イ ク デ ン マ	ス ウ エ ー デ ン	ラ イ ン ド	ア ラ ト ビ	チ エ コ	ニ ア ル メ	ア ボ ス ニ	リ ハ ン ガ	リ ア ル ガ	ロ シ ア	ポ ー ラ	現 代 ギ リ シ ア	古 代 ギ リ シ ア	194 5
															04
															05
											1				06
										1	2			1	07
									1		3	4			08
				1				2		1			1		09
															10
															11
															12
															13
													2	2	14
															15
															16
			2								4	1	2	1	17
3		1									4	1			18
	1				3	1	1	1		2	4	5	1		19
				1							4	6	4	1	20
											3				21
															22
															23
															24
															25
		1													26
															27
															28
															29
															30
															31
															32
															33
															34
															35
															36
															37
															38
															39
															40
															41
															42
															43
														1	44
															45
															46
															47
															48
															49
														1	50
														1	51
											1				52
															53
															54
												1			55
															56
															57
															58
															59
															60
															61
															62
															63

表1…周作人翻訳文学国別・年別統計

現 代 日 本	古 典 日 本	カ ア メ リ	ス イ ス	ン ス ペ イ	ア イ タ リ	ド イ ツ	ス フ ラ ン	ス イ ギ リ	イ ナ ウ ク ラ	ア ラ ブ	イ ン ド
		1						2		1	
		1					1	1			
							1				
							5				
1								1			
1											
14							2	2			1
6	4			1			1				
9	1						5	3			
2	1	2				2	4	1			
1				1			1	1			
1	5							2			
2	6							1			
2											
1								1			
1											
2											
7											
									1		
		1									
		1									
		1									
		1									

\*この表は『周作人研究資料』（張菊香・張鉄栄編、一九八三年、天津人民出版社）に基づいて作成したが、一部「周作人日記」などにより補った部分もある。